ジェンダーのくびき〈上〉

アフガニスタン

ペンから力得る女性たち

20160529
朝日新聞

「私は書きたい／決して実現しない私の夢を／世界が耳を傾けない私の言葉を／ペンをください／それだけが望み」（「流れた血に私の詩を読んで」エマーン、20代）

ペンで自分を表現することが、女性の命取りとなる国が今もある。アフガニスタンはその一つだ。イスラム原理主義のタリバン政権は崩壊したが、ジェンダー（文化・社会的性差）のくびきは厳然と残り、女性の教育や自己表現は保守派の暴力の的となる。国連は女性を巡る環境が世界最悪水準と指摘する。

この状況下、女性たちの詩やエッセーをネットで発表する活動がひそかに広がっている。「自分の物語を語ることは人としての権利だ」とする米国人ジャーナリストが非政府組織（NGO）を創設した。

筆者は10～50代まで200人以上。作者は特定できないようにしているが、英語や現地語の作品は国境を越えて読者をとらえる。強いられた沈黙を破り、無名の詩人やエッセイストたちがアフガン各地で語った。

自転車に憧れ

【ニラブ、18歳】10歳のころ、自転車に乗りたかった。東部の故郷では、女が自転車に乗るなんて考えられないこと。父は駄目だと言う。でも成長したら（顔や全身を覆う）ブルカを着ないといけないし、乗れば死の脅迫も受ける。

「今しかない」。父がいない時、庭で練習した。何度も転んでけがをし、前に進むようになった。ある日、年下の親戚の男の子が私を見て驚いた。「どうやって乗れるようになったの。競争しよう」

私はとても速かった。「女の子が自転車に乗っている」。みんなが私を見た。非難する人もいて傷ついたけど、夢をかなえた時を忘れない。

小学生の時、女子教育に反対する男たちが校舎を爆破した。泣いて逃げ回り靴を片方なくした。父を含め男たちは「女の学校なんて意味はない」。男たちがつくった社会のルールは私たちの自由と権利を奪う。私は思った。今はあなた方の支配下にいるけど、見てなさい。私の心は服従しない。いつか力のある人になって社会を変える。

まだ十分じゃないけど、私は力を得た。それは書くこと。物乞いをする女性に「あなたの人生を教えて」と聞く。脅迫を乗り越え大統領選で初めて投票した叔母たちの喜び、自転車で走った日のことも書く。アフガン女性は「かわいそうな犠牲者」ばかりじゃない。心も知恵もある。

女が英語で文章を書いている、と知られたら命を狙われる。でもペンがあれば、誰も私を倒せない。娘は息子より劣ると言っていた父が私の作品を読んで「おまえが誇らしい」と言った。父の愛を得られたとうれしかった。「疲れ切った時／夢の世界にひたる／自由で恐怖がない、自分でいられる場所／遠いけれどいずれ私はたどり着く」（「夢の世界」）

紙が足りない

【アフサナ、フレシタ、ネジナ、いずれも22歳】流血や女性への暴力を嫌というほど見た。生きている間に平和は来ないでしょう。でも文章で表現することを知って私たちは変わった。自分を深く知り、喜びや悲しみを分かち合える。

男たちの集団リンチで殺された女性の事件をエッセーで取り上げ、女性への暴力を阻止するために声を上げようと訴えた。国を救うことは不可能だけど、書くことで一人の女性を救えればと思う。

【アセファ、25歳】地方に行って、読み書きができない（アフガンの多数派）パシュトゥン人の女性たちの話を聞き書きする。とても保守的な部族社会に生きる彼女たちの人生は厳しく、紙が100万枚あっても足りない。私は書くことで自分に何ができるか知った。だから彼女たちに、人生は自分で変えられると伝えたい。難民にならずに、ここでみんなが幸せに暮らせますように。そう願いながら書く。

次代に言葉を

【シュグファ、19歳】母は17歳で結婚した。義務だった。女の人生を家族が決める伝統は今も残るけど母は言う。「人生を自分で開きなさい。私はできなかったから」

外国の人がネットで私の詩に「感動した」と書いてくれる。とてもうれしい。生きていく困難を乗り越えられる。いつも大きなノートを持ち歩いている。歴史や地理の本を5冊、出版したの。

夢は産科医になること。時々絶望的な気持ちになる。私たちは苦しむために生まれたの？　自爆テロで死ぬ子供。硫酸をかけられる女性。イスラム聖職者は「無実の一人の殺害は世界を殺すこと。一人の救済は世界を救うこと」と教えるのに。

家から外出する時に生きて帰れるかしら、と思う。でも私が死んでも言葉は生き続けるでしょ？　今の社会を私たちが変えられなくても、次世代に言葉を伝えたい。あきらめないで、と。「私はもう弱くも小さくもない／沈黙を強いる者に向かって言葉を発する」（「美しき故郷カンダハル」）。

（共同通信記者　舟越美夏、敬称略）

表現することへの渇望

非政府組織（NGO）「アフガニスタン女性の作文プロジェクト」（AWWP）のサイトを見つけたのは偶然だった。初めて読む、今を生きるアフガン女性の作品。「表現すること」への渇望が迫り、思わず涙した。

話を聞いた10～20代の聡明（そうめい）さと覚悟に接し、未来は明るいと思ったが楽観的過ぎた。若い女性たちが口にする「次世代のために」という言葉が、現実の厳しさを物語っていた。

2009年創設のAWWPは作品集2冊を出版。女性たちはネットで米国の作家らとやりとりし作品を仕上げる。29歳でAWWPアフガン代表のシータがブルカで顔を隠し取材した経験を書いた詩「ブルカの下で」は反響を呼んだ。

「ブルカは危険から私を守り／私は闘いを続ける／そう、それは私。ブルカの下のアフガン女性。覚えていて」

アフガニスタンの伝統的な青いブルカに身を包んだAWPAアフガン代表のシータ。ブルカをかぶるのは好きではないが、自分の身を守るには仕方がないとつぶやく
＝アフガニスタン・カブール（撮影・安井浩美、共同）

アフガニスタン・カブールの公園で、コーランを焼いたと事実無根の罪を着せられリンチで死亡した女性や、姦通罪の疑いでタリバンに殺害された女性の人権を訴える女性活動家たち（撮影・安井浩美、共同）

＝次回は6月5日に掲載します